

月刊がん “がんと生きる”患者と家族の交流誌

MEDICAL PRESS for CANCER

6

2001年6月号
vol.20

もっと いい日

特集

乳がん・婦人科系がん

予防と治療、
再発防止

●乳がん ●子宮頸がん ●子宮体がん ●卵巣がん ●リンパ浮腫 ―“術後のむくみ”の予防と治療

逸見晴恵のちょっとおじゃまします

「がんにならないための暮らしの知恵」

岐阜大学学長(前日本癌学会会長) 黒木登志夫さん

いのちきらめく 「リンパの会」 代表 神保キサエさん

望まれる保険適用、医療関係者や周囲の理解を求めて



「子育てが充実しているか
ら仕事もできるし、喜び
につながる。母や夫に感
謝して、いまを大切に、
少しでも長生きしたい」

千葉県出身。栄養士。大学の実験助手、製薬会社の研究員、香港の貿易会社でアジア各地を回る仕事などを経て、結婚。1997年に左卵巣がんで手術。99年に右卵巣に再発して手術。この間、2児を出産。現在は玄米菜食、マイナスイオン療法、免疫力を高めるリフレッシュ療法を続けながら、子育てと仕事の両立を目指す。31歳。

内野由利子 うちの・ゆりこさん

取材・文◎安井禮子
撮影◎難波竹一郎

やすい・れいこ

元「東京新聞」健康面デスク。介護保険・ターミナルケア・がん性疼痛治療・更年期医療を中心とする女性の健康問題などをカバー。82年、90年、93年アップジョン医学記事賞受賞。医学ジャーナリスト協会会員。

最初の妊娠で、がんとは知らずに受けた卵巣摘出手術。いきなり再発を告げられた2度目の産後の卵巣がん手術、そして抗がん剤治療。「本当の情報を知りたい。そのうえで、患者が主体の治療を受けたい」——体当たりで医療機関を訪ね歩いた。現在は食事療法やリフレッシュ療法で免疫力を高めながら、仕事に復帰。自分の体験を、がんと闘う患者さんのために役立てる活動も始めている。

再発で知った 卵巣がん

都心を一望に見下ろす霞が関ビル。ビジネスマンが忙しく行き交う硬質の空間のなかで、職場の了解を得て席を外してきたという内野由利子さんは、どこか頼りなげな可憐な女性に見えた。しかし、静かな語り口とは裏腹に、2度の出産とそれがきっかけで見つかった2度の卵巣がん手術を乗り越えてきた体験を聞くうち、生命の危機に直面した人の張り詰めた思いが伝わってきた。

日本地図を作った伊能忠敬の出身地として知られる千葉県佐原市で、農業を営む両親と同じ敷地内に夫とふたりの子どもたちと暮らす。

時は1997年3月、内野さんは妊娠と思って近所の産婦人科医院を受診した。「双子です。おめでとう」と言われたが、おなかの様子がごろごろしておかしい。そこで、以前、実験助手として働いていた慶應義塾大学病院へ受診に行った。結果は、「妊娠だが、卵巣も腫れています。様子を見ましよう」。しかし、地元の総合病院の医師から「腫瘍が胎児と一緒に育っているの、すぐ手術が必要」と言われ、妊娠4カ月で右卵巣の摘出手術を受けた。医師は「おなかの子は、半分は難しいでしょう」と言っ



由利子さんに抱かれて甘える長女の裕希ちゃん

たが、10月には正常分娩で長女・裕希ちゃんが誕生した。

「でも、いま考えると勉強不足だったですね」と内野さんは振り返る。摘出された右卵巣は1・4kg。細胞診についての医師の説明は「いいものではないけれど、悪いものでもない」。退院時には「心配ない。普通の生活をして大丈夫」と言われたのを幸い、子育てに精一杯で、病気のことは忘れてしまったのだ。

1年7カ月後の99年5月、内野さんは同じ病院で、次女・未稀ちゃんを今度も正常分娩で出産した。

2度目の出産後は、子宮収縮の痛みがきつい。1週間ほどでそれも治まりホッとしていると、今度はおなかの左側がつれるように痛む。超音波検査をした主治医は、あわてた様子で、「残念だが左卵巣にがんが再発しています」と告げた。

いきなりの再発告知に、内野さんは「私はがんだったの?」とショックを受けた。同時に「本当にがんなのだろうか」と疑心暗鬼になり、主治医への信頼は一挙に崩れ去ったかにみえた。

「最初の手術の説明では、がん

という言葉は使われなかった。あのときにきちんと説明されていれば、再発予防の努力もできたのに」

インフォームド・コンセント(十分な説明と同意)の大事さが言われながらも、実際には、がんという言葉を使わずに、ぼかした表現で説明される例も少なくないようだ。内野さんの場合、主治医は「手術したのだから、わかっているはず」と考えたのか、「産後の女性にショックを与えない」配慮だったのか。いずれにせよ、あいまいな表現は、内野さんにとっては、安心どころか、不

自宅近くの香取神宮の石段を慎重に下りる内野さん一家。
左から次女・未稀ちゃん、由利子さん、長女・裕希ちゃん、夫の善裕さん



新緑の境内を仲良く散歩。夫の善裕さんの背中が頼もしい

情報求めて 疾走

母親として初乳は飲ませたものの、生まれたばかりのわが子は、実家のお母さんに抱かれて退院。独り病院に取り残された内野さんは、周囲の幸せそうな母子をみるだけで涙が止まらなかった。

十分な説明“でしかなかった”。

「慶應病院の研究室で私がやってきた仕事は、まさにがん細胞の培養。がんの怖さは十分知っていたのに、それを自分に当てはめてみることはしなかったんです」そんな自分にも悔いがある。

一方、手術は2週間後と決まった。検査が進むのと並行して、確かな情報がほしいという気持ちは抑えようもなくなった。病院を抜け出し、パジャマのままタクシーに飛び乗ると、図書館からがん関連の本を10冊単位で借りてきて読んだ。書店でもどきどきと買い込んできては読み続けた。

「夫は仕事と子どもと家のことで手いっぱい、頼れる場合じゃない。がんのことは自分で見極めなくてはと、必死でした」

わかったことは、がんの再発では免疫力が落ち、他の臓器へも転移している可能性が高いこと。転移している箇所を確かめるには、群馬大学病院医学部にある最新のポジトロンCTで確認するのがベスト。そう決めると、主治医に紹介状を書いてもらい、病院から1泊2日の外泊許可をとって、同大学病院核医学科へ検査を受けに行った。

「飛び入りでお願いしたのに、あの時点で受け入れてくれた先生には感謝ですね」

結果は、他への転移は見られなかった。だが、左卵巣が破裂していたら危険な状態だったとも知らされた。

最初の右卵巣がんの手術が苦しかったのも、再度の開腹手術は避けたいと、おなかに穴を開けて卵巣だけ取り出す腹腔内手術はできないものか同大腫瘍外来で確かめ

たが、それは無理と言われ納得。元の病院に戻り、左卵巣の摘出手術を受けた。

内野さんの話を聞きながら、入院患者がここまで行動するのは、実は大変なことなのではと思えてきた。多くの場合、患者は治療方針への疑問や不満があっても、主治医との関係が悪くなるのを恐れて我慢したり、医師に“お任せ”になりがちだ。しかし、産後の身でがん再発という事態にもめげず、入院中の病院のスケジュールを引き延ばしつつ、自力で段取りをつけて他県の大学まで検査を受けに行った内野さんの勇氣ある行動を知れば、患者として励まされる人も多いだろう。

摘出された左卵巣は9cm×5cmあった。大きくなり始めると早いタイプのがんで、術後2週間で抗がん剤を始めると言われた。

そこでまたもや内野さんは行動を開始。抜糸する前に病院を抜け出し、抗がん剤に詳しい医師に相談に行った。その意見は「本当は抗がん剤はやらないほうがよい。やるなら免疫力を高めながら受けること」

主治医は抗がん剤はあくまでもやらなければ駄目という方針。そこで1クール目は、サプリメントを飲みながら受け、そのせいか、副作用はつらくなくてすんだ。

近所の人が入院してきたので、「こんな様子を知られたくない」と、

由利子さんの実家は、がっしりした平屋の古い建物。彼女の闘病で頓挫していた新築工事がスタートして、土台まで出来上がった。この夏には新居が完成する予定だ



近くの総合病院に転院、2クール目からはここで抗がん剤を受けることにした。この間にも、「結果は報告しますから」と言って、主治医から病理検査のプレパラートを借り出し、卵巣がんに詳しい東京慈恵会医科大学付属病院へ意見を聞きに行った。

「慈恵医大では、『何が知りたいのか』と聞かれたので、『セカンドオピニオンが聞きたい』とはっきり言いました。結果は、決してよいものではない。細胞の分化度が悪い。抗がん剤治療はきつちりやるべきだ、と。『僕だったら10クールやるよ』とも言われ、頑張ろうという気持ちになりました」

シスプラチン、ビンブラスチン、プレオマイシンの組み合わせで、4クール目に入ったが、白血球の数が2000ぐらいに減り、薬でもその数は上がらなくなった。白血球が1000以下になり、心臓

の不整脈がひどくなったとき、やはり抗がん剤治療を受けていた隣室の人が、白血球が500ぐらいに下がって亡くなった。

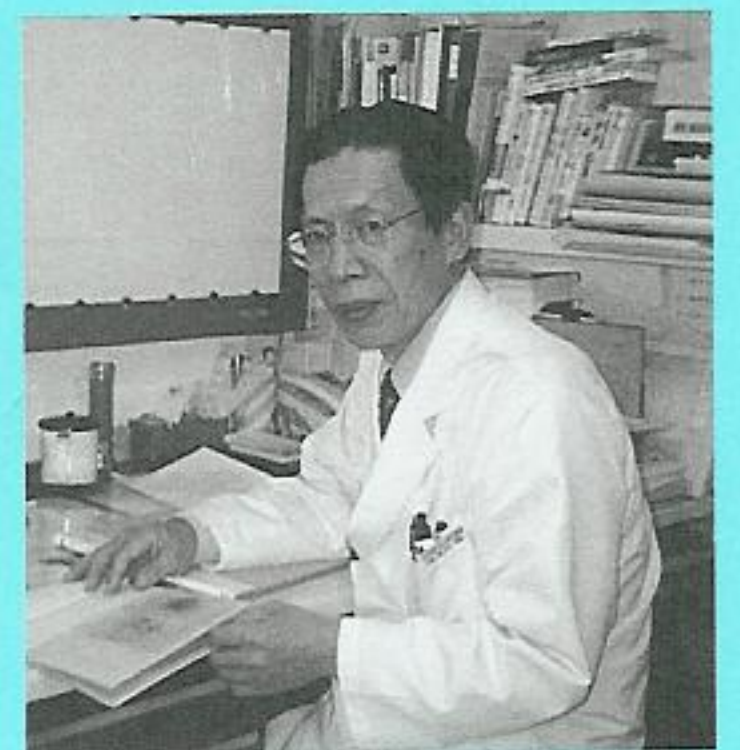
「このままでは殺される」——内野さんは、抗がん剤治療を中断して、家に帰る決心をした。「毎日、人が欠けていく。そこにいることが体がストレスで、精神的に参ってしまふ。それより家にいたいと思っただけです」

4カ月ぶりのわが家では、下の子はすっかりおばあちゃん子になっていたが、子どもたちの顔を見るだけで感謝の気持ちでいっぱいになった。

しかし、再々発から逃れるには、専門医を見極めて予防しなくてはと、東京・巣鴨のホリスティック京北病院を受診することにした。この病院では、小林常雄院長が開発した腫瘍マーカー総合診断で発症前のがんのリスクをチェック、評価に合わせた免疫力を高める治療で、発症の予防に力を入れている。

「受診のとき、データとして、カルテのコピーを持っていきました。その結果、私の状態では、それまでの治療は、免疫力を落とすだけで、まったく役に立っていない。やるべきことは免疫力を高めることだと言われました」

内野さんが受けた抗がん剤治療が無意味だったかどうかは、議論の余地もあるだろう。だが、再発



小林常雄・ホリスティック京北病院院長

予防の抗がん剤治療は、個々人に合った方法で、専門医の厳密なコントロールのもとに行われるべきもの。やり過ぎないための細心の注意もおろそかにしてほしくない。一方、大きくなった卵巣がんの摘出手術まで無意味だったわけではないだろう。

「確かに、卵巣がんの手術を成功させてくださった主治医には、感謝なんです。でも、医師は忙しすぎて、患者がじっくり自分の意見を言える雰囲気もない。でも、患者が求めているのは、一緒に病氣と闘ってくれる医師なんです」

東奔西走、体当たりの試行錯誤で内野さんが求めてきたものは、患者が納得して参加できる医療、それを可能にしてくれる信頼できて相性のいい医師との出会いだった。

再発予防に賭ける

現在、内野さんは再発予防のために、3つの方法に取り組んでいるという。ひとつ目は、小林院長のもとで続けているリフレクシユ療法。運動、温冷浴、遠赤外線サウナなどで体内の有害微量物質（毒素）を除去し、食事を含めた生活習慣の改善で免疫力を高める。

ふたつ目は、玄米と野菜中心の食事療法。発芽玄米による食事指導などで知られる鈴木秀夫医師（千葉県山武町・鈴木医院）の指導に従って、よく噛んで食べるのが基本。内野さんの場合、実家の両親がつくる低農薬の米と野菜が常



家のそばの畑で、野菜を収穫する母・幸子さん（手前）と一緒に

「将来、子どもたちに自分の生きざまを話したい……」



に手に入るのが強みだ。

3つ目は、マイナスイオン療法。香川県坂出市の堀口昇医師の考案によるもので、マイナスイオンの発生装置を使って、体内のイオンバランスを整え、細胞を活性化させるという。

診察を受ける内野さんに同行して、ホリスティック京北病院を訪ねた。小林院長はいったん話し始めると止まるところを知らない。「予防に転換しなければ、がん戦争に勝ち目はない。すでにアメリカの流れは予防に変わったのに、なぜ日本では食べ物とがんの研究にもっと力を入れないのか。がんは生活習慣病、がんを3割減らせば脳溢血や心臓病も7〜8割減る。医療費の削減には予防しかない」「がん細胞は環境が悪いために不良少年になったようなもので、友達と

思えば相手も身構えないし、安心して再発予防に取り組める」など、ユニークな解説も次々飛び出す。

1個のがん細胞が、診断可能な早期がんの大きさに成長するには約9年。がん細胞の増殖にはがん血管や間質細胞の関与が欠かせないが、そこから出るリボヌクレアーゼ、ALPアイソザイムのふたつの微量物質に着目したのが、腫瘍マーカー総合診断。微小がんの段階で危険をキャッチし、免疫力を高める治療で発症を予防するという発想は魅力的だが、それならどうしてもっと多くの病院に普及しないのだろうか、と思いつきながら聞いていた。

鈴木医師には、アメリカの医療用顕微鏡を使った血液分析のセミナーで会う機会があった。抹消血液を1滴採取し、顕微鏡を通してモニター画面に映し出し、白血球の動きや赤血球の形を患者も一緒に見ていく。血液の凝固状態などから、活性酸素や免疫、栄養、代謝の状態もわかる。それによって詳しい検査を勧めたり、サプリメントを使った改善を指導する。アメリカで関心の高まっている統合医療のひとつという。

鈴木医師は、この顕微鏡を聴診器のように、診療の場で活用しているという。玄米食と西洋医学の関係を訪ねると、「西洋医学は重要だが、方法はほかにもいろいろあるとい



由利子さんを優しく見守る母・幸子さん(左)

うことです」との答えだった。

この取材では、次々紹介される聞き慣れない検査や治療法に驚かされた。がんの患者さんのなかには、手術や抗がん剤といった標準的な治療法以外に、「がんによい」といわれるものを試している人が多い。費用が大変だという話も聞く。批判的に見る一方で、こうした現実が問い掛けているものを、がんになった人の視点で、考えていく必要があるだろう。

内野さんのふたりの小さな娘さんとお母さんには、東京・巣鴨駅近くの公園でお会いした。診察を受けている間、ここで待っていたのだ。孫たちを遊ばせながら、「娘の入院のときは、この子たちを自分の子として育てることになるのかなあと本気で思いましたよ」と、

いまはおばあちゃん役に落ち着いたお母さんは話す。

「母にも夫にも、本当に感謝なんです。その支えがなかったら、子育てと闘病生活は成り立たなかったですから」と、若いママの顔に戻った内野さん。

だが、行動の人らしく、自分の体験をがんと闘う人のために役立てる活動も始めた。栄養士として、すでに10人ほどのがんの仲間たちの食事相談をボランティアで引き受けている。

朝6時半に起きて、子どもたちを保育園に連れていく準備をする。7時には夫が仕事に出掛ける。週2回、会社に行く日は、内野さん自身も7時半には家を出るが、普段は在宅で仕事——こんな当たり前の生活が、決して当たり前ではないことを、子どもや夫と離れて過ごした入院生活で痛感した。

「子どもたちとの触れ合いは、かけがえのない時間。でも、仕事もひとつの行動療法。子育てが充実しているから、仕事もできるし、それが喜びにつながる。いまを大切に、うまく体の状態を保ちながら、少しでも長生きしたい」

納得のいく医療を求めて、体当たりで動き回った日々。将来、子どもたちにそんな自分の生きざまを話したいと思う。

「その日のために、いまも闘い中なんです」